

1996年6月14日 第三種郵便物認可
2008年5月1日発行（毎月1回・1日発行）第152号

5

第152号

2008 May



全国をネットワークする
自然豊かな川づくりのための

情報交換・交流ツール



(財)リバーフロント整備センター

多自然 研究

Riverfront
Information

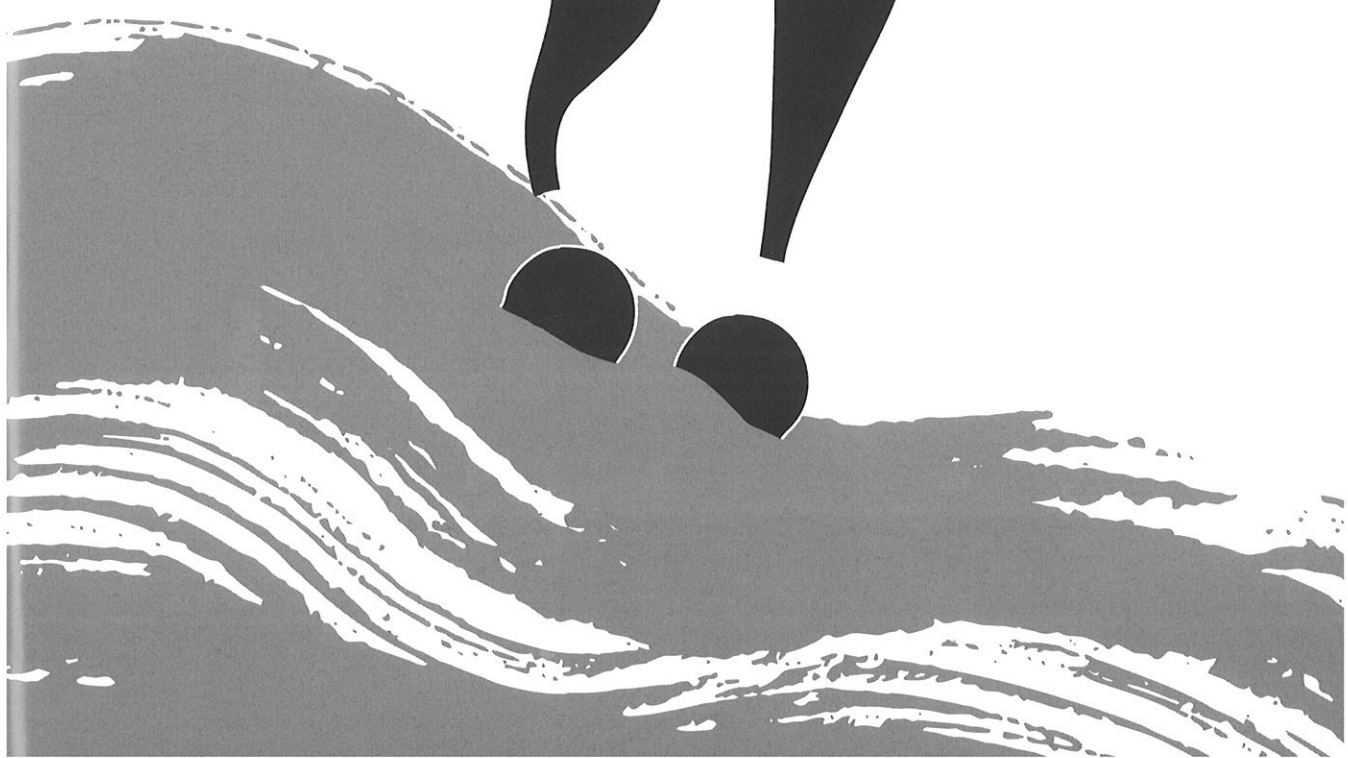
●—— Riverside ——●

●—— Live ——●

●—— Environment ——●

●—— Ecosystem ——●

●—— Research ——●



河川景観における実践活動 —福井県日野川川下り—

沖田 ちづる^{*}、田中 保士^{**}、上木 善憲^{***}

1.はじめに

河川の利用と管理は、従来は治水と利水を目的として行政の河川管理者が主体となって行ってきたが、最近では流域の良好な自然環境と景観に焦点が向けられ、河川管理者だけではなく地域住民も積極的に参加するようになってきた。特に住民主導組織を立ち上げ、その組織が河川行政の取り組みに関与することで、具体的な河川整備や流域振興を図ることが可能であると考えられる。住民主導組織のメンバーを構成する際に欠かせないのは、流域周辺の状況や川の自然環境に詳しく地域に定着した住民を中心に置くことであり、そのような地域住民が河川管理者に提案を投げかけていくことが重要である（沖田2006）。

福井県の日野川流域では、住民主導組織「日野川流域交流会」が展開しており、現在の積極的な取り組みの1つとして、体験に学ぶ流域交流と河川景観の探訪があげられる。

本論文では、日野川川下りを行うことにより、その視野から日野川の状況を把握し、河川景観への理解と提案について深めていくことを目的とした、河川景観における実践活動について考察する。

2.体験に学ぶ流域交流と河川景観の探訪

「日野川流域交流会」は、日野川流域にて活躍する環境保全団体が「川の駅」となって協議の場を持つ、「川の駅」交流連携活動の実施、サクラマスの回帰する川こそ人間にとってはよい川であることを投げかけ、流域内の各団体が、それぞれの地域で川をよみがえらせて、川をさかのぼる習性のあるサクラマスを徐々に上流へ戻すといった「サクラマスの駅伝」への取り組み、

川の指導者育成および全国での意見交換などを行っている（沖田2005）。

当交流会では、2007年のプロジェクトとして、「川と人とのいい関係・水環境と歴史的砂防施設を活用した地域づくり」に加えて、「サクラマスの駅伝・体験に学ぶ流域交流と河川景観の探訪」の活動に力を入れている。川人の駅伝川下りと称して、日野川上流からカヌー・Eボートで下る川に学ぶ体験活動を行っている。スタートは広野集落であり、今庄支所前、レインボーパーク南条、松ヶ鼻園地、日野川河川緑地、白鬼女橋、鯖江大橋、石田橋へと進み、ゴールを清水山橋としながら駅伝川下りを予定している。2007年8月から2008年5月までゆっくり下ることとする。この取り組みは、河川環境管理財団助成事業である。2007年2月10日には、Eボートを囲んで、住民・少年・指導者が参加した川人のメッセージフォーラムが行われた。

川下りを実施することにより、日野川流域におけるダムや床止工などの横断施設の役割に理解を深め、カヌーやボートを活用し、川の危険および安全性について学び、日野川の上流から下流の様子を直接的に体験して観察することで、水辺の生態系を含めた総合的な河川景観について検討を進めていくこととする。

3.福井県日野川川下りの活動概要

日野川には、広野ダムまたは床止工や取水工など38箇所の横断構造物があり、それらに着目しながら、川下りを実施している。これまで2007年9月2日、上流域の大門から今庄支所付近で活動が進められた。10月7日は、中上流域の越前市から下流域の鯖江市という区間にて、カヤック川下りが行われ、図1に示すように、スター

^{*}環境文化研究所研究員、^{**}環境文化研究所（日野川流域交流会推進委員長）、^{***}武生商工会議所（日野川流域交流会事務局）

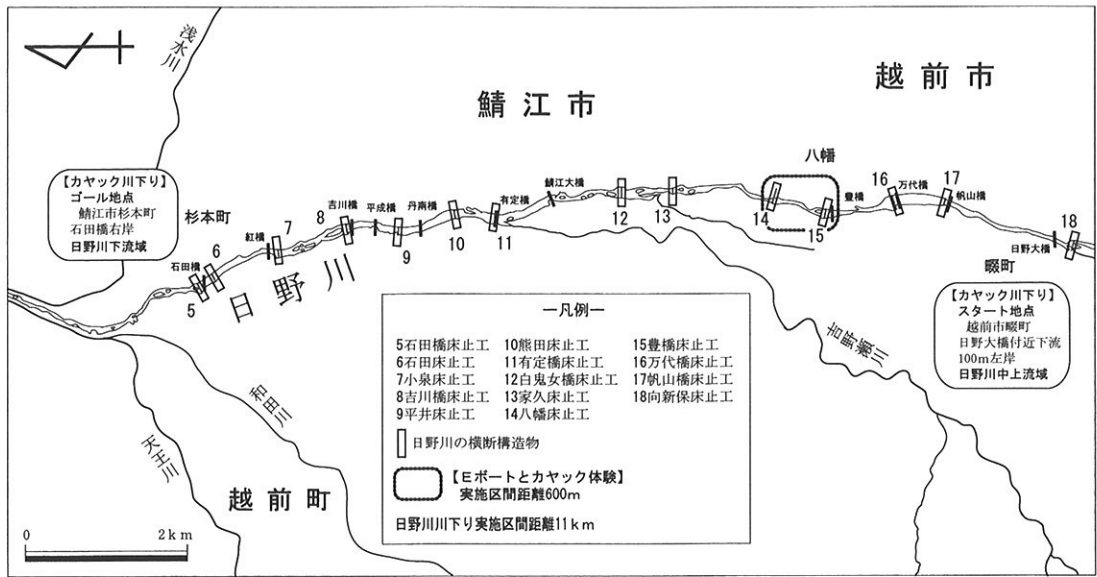


図1 福井県日野川川下り実施区間（2007年10月）
田中（2006）、日野川流域交流会（2006～2007）および実態調査により、沖田作成。

ト地点を越前市吸町・日野大橋付近下流100 m左岸、ゴール地点を鯖江市杉本町・石田橋右岸までとし、実施区間距離11 kmである。日野川全体を通して、施設番号は38存在するが、本論文では、10月実施区間に視点を置き、日野川の河川景観について検討していくことにする。

10月7日の活動内容は、河川空間を観察しながら川下りを実施し、感想や提案を自由に発表し合うもので、参加者は、福井県在住のカヤックメンバー、日野川流域交流会会員、福井工業大学カヌー部関係者、他県のインストラクター・流域保全団体、「NPO法人川に学ぶ体験活動協議会（RAC）リーダー以上」といったメンバー20数人である。今回の日野川川下りでは、川の周辺の様子や川の流れを把握する、堰堤や魚道の状況について検討する、川の指導者としてのスキルアップを図ることを目的とする。日野川川下りゴール地点（鯖江市）には、「日野川流域交流会」シンボルカラー旗を立てた（写真1）。当地点の選定した理由として、川遊びやカヌーに適している箇所であり、河川敷に物が置ける（周辺が広いのため）ことなどがあげられる。日野川カヤック川下り参加者（写真2）が次々とゴール地点へ到着し、皆が合流した後、

昼食を兼ねた意見交流会が開かれ、日野川の様子について語り合った（写真3）。そこで、実際にカヤック川下りを体験した参加者たちが、日野川周辺を見渡し、確認しながら、日野川川下りの河川図に、日野川の景観について感じた意見を記入した（写真4）。その内容を整理したのが表1であり、特に日野川の自然度が高い箇所に関心が深まったことがわかる。また、質問項目を設け、カヤック川下り参加者から日野川川下りについて感想を述べてもらった（表2.1）。その結果から、川下りを体感する頻度を高めることにより、川の指導者育成を進めていく上で効果が促進されると考えられる。

10月28日には、県内初のEボートによる体験活動を開催した。図1に示すように、14～15付近の越前市八幡で、実施区間距離600 mである。活動内容は、Eボートとカヤックの体験教室や河川空間の観察を実施するもので、参加者は17名、10人乗りEボートに乗れない方にも、カヌー教室の企画を用意した。Eボート参加者からは、カヤック川下りの場合と同じく、自然状況についての意見が積極的であることから（表2.2）、これからの日野川の自然景観を保全していくにあたって、良い機会が得られたのではな



写真1 日野川川下りゴール地点（鯖江市）
2007年10月沖田撮影



写真2 日野川カヤック川下りをする参加者
2007年10月沖田撮影



写真3 意見交流会の様子
2007年10月沖田撮影



写真4 日野川川下りの河川図に意見を記入
2007年10月沖田撮影

表1 日野川の河川景観における意見内容（2007年10月）

施設番号	意見内容
15～16付近	ヤマセミ生息
15	伏流水があり水きれいで魚がいっぱい 危険魚道
14～15 付近	釣り人発見
13	カワセミ生息
12～13付近	「自然度が高い箇所」 湿原コース（釧路湿原のようなところ）
11	この辺りから川の水が汚くなる
10～11 付近	「自然度が高い箇所」 湿原コース（ジャングルのようなところ） 水量が増えるととても危険
10	鉄筋がある
9	川の整備がしてあると見えやすい
8～9 付近	この辺りから水がきれいになる
5～8 付近	少し深いセピア色の日野川であり、昔ながらの風景を醸し出している

日野川流域交流会（2007）および実態調査により、沖田作成。

表2.1 福井県日野川川下りに関する参加者の意見内容（2007年10月）

質問項目	カヤック川下り参加者の意見内容	
1. 日野川の景観と印象が強かった所	上流の水は冷たい	
	伏流水があるところは清流である	
	比較的日野川の水はきれいな状態である	
	「自然度が高い箇所」 湿原コース（釧路湿原のようなところ） 伏流水があり水がきれい	
	「自然度が高い箇所」 湿原コース（ジャングルのようなところ） 日野川中流域は、木々の枝のトンネルが広がり、源流のような状態である。	
	蛇行している箇所	
	川の水量が少ない箇所 川岸にペットボトルやカンごみ・タイヤがある	
2. 今回勉強になったこと （スキルポイント）	「初めて川で実践した参加者」 従来のプールでの実施と違う感覚を覚えた 思ったより川の流れの勢いがあった 瀬の状態を把握し、流れの変化を感じた 川のすべる箇所があり、川底の状態を知った 川の狭いところで、水量が増えたとあぶない 日野川の自然の楽しさを川下りで体感できた 大勢での触れ合いの楽しさを知った 川下りに時間がかかったことから、事前に下見して確認し、川下りを行うと効率が良い。	
	3. 今後活かしたいこと （日野川の景観） （指導者育成・環境教育）	川の水がきれいであってほしい箇所がある 魚や野鳥が見えるところを教えてあげたい 「河道内樹林整備の検討」 人が川に近づく場所が限られており、人と自然の共生の場が必要である。 「指導者（活動の場を提供する側）」 子どもは楽しさを見つける能力が長けている 親子で楽しむ場を提供する 川遊びの場を提供し、危険と楽しさの隣り合わせを把握して、見守る役目に最善を尽くす。 クロールより泳ぎやすい方法を教えたり、ライフジャケット着用の安全対策を整え、Eボートを活用し、子どもに川の流れの感覚を覚えさせる。 「日野川流域交流会」では、川下りの適している場所について実践的に検討し、今後、カヤック教室を開くことを長期的に試みており、まずは、子どもに川遊びを楽しませて、どういうところが危ないのか教え、川水に慣らすなどの慎重な事前準備を整えることが必要。

日野川流域交流会（2007）および実態調査により、沖田作成。

いかと思われる。

4. 日野川流域における環境教育の促進

「日野川流域交流会」では、環境教育を向上するため、「子どもの水辺」の登録団体と連携して、体験活動を実施し、川の指導者認定システムを導入している。「NPO法人川に学ぶ体験活動協議会（RAC）」およびCONEと連携して、安全に楽しく体験活動を引率する「指導者育成」、「子どもの水辺安全講座」などの教育活動に力を

入れている。最近の動きとして、日野川で初の『子どもの水辺安全講座』が開催され、2006年8月23日には、田倉川上流にてカヌー体験活動が行われた。特に日野川上流域は研修施設があり、水辺観察や生態系調査などを積極的に行うことができる条件が揃っており、環境教育を進めていく上で効果的である。実際に2004年6月、当該流域にて、福井県川の初級指導者育成講座（第1期）が進められた。

表2.2 福井県日野川川下りに関する参加者の意見内容（2007年10月）

質問項目	Eボート・カヤック体験参加者の意見内容
1. 日野川の景観と印象の強かった所	川の流れや風向きも影響し、川を登る時・下る時の感覚が違った。 自然との一体感を感じた 水上から見る川の景色は、人や建物がいっぱい陸の景色とは違って、木もたくさん生えて自然が多く、ボートに乗っているととても静かだ。 思ったより水がきれい魚も見えた 漁協の方がウグイの稚魚がたくさんいるとの報告
2. 今回勉強になったこと (スキルポイント)	「指導者（活動の場を提供する側）」 橋脚で上流からの漂流物たまった危険な箇所 河床に鉄筋の突起物やコンクリートブロックある Eボートの組み立てを学んだ ボーイスカウトの参加者も多かったため、チームワークが発揮でき、空気入れから座席の設置までスムーズに行えた。 オールの使い方、コースの説明を把握した 10人もいとそれぞれの体力も異なり、息を合わせ予定のルートを通るのは難しい。
3. 今後に活かしたいこと (日野川の景観) (指導者育成・環境教育)	「指導者（活動の場を提供する側）」 実施区間は、ボート体験には深みもあり、街に近いため来やすいところである。 河川内の樹林が繁茂しており、人が水辺に近づくとところが少ないことから、人と自然の共生の場が必要である。

日野川流域交流会（2007）および実態調査により、沖田作成。

5. おわりに

本論文では、福井県日野川川下りを行うことにより、その視野から日野川の状況を把握するといった河川景観における実践活動について着目してきた。したがって、川下りを通して、景観を眺めることにより、周辺の特徴を詳細に捉え、日野川の環境保全への具体的な対策を検討することが可能であると考えられる。さらに次世代を担う子ども達が体感することにより、歴史的景観と文化、守りたい日野川の自然環境といった環境認識への理解を深め、人と自然が共存できる川の重要性を積極的に働きかける効果をもたらすことが期待できる。

今後の提案としては、より多くの流域住民による参加を投げかけ、流域住民間の意見交流の促進を図ることを目的としつつ、川での体験活動の頻度を高め、日野川の景観と保全について確認し話し合うことが重要である。現地観察および既存資料や昔からの居住者からの聞き取り調査などの情報収集を通して、昔親しんだ日野川と現在の日野川の景観を比較し、良い点は残し、改良すべき点は調整することが望ましいと考えられる。日野川川下りに関する参加者に関

して、「指導者（活動の場を提供する側）」と「学習者（活動に参加する側）」という両者の立場から詳細に検証していくことが必要である。指導者に対して親の視点から子どもにしてもらいたいこと、子どもたちが指導者にしてもらいたいこと、指導者として子どもたちに活かしたいことを整理する必要がある。それを行うことにより、効果的な環境教育の実現につながることが可能であろう。

謝辞

河川景観の実践活動を進めていくにあたり、日野川カヤック川下りでは、日野川流域交流会会員、福井工業大学カヌー部関係者、他県のインストラクター・流域保全団体、「NPO法人川に学ぶ体験活動協議会（RAC）」会員、福井県在住のカヤックメンバー、日野川周辺住民の方々、Eボート・カヤック体験では、日野川流域交流会会員、中日本砂利さん、八幡町の区長さん、日野川漁協の皆さん、九頭竜川ダム統括事務所さん、日野川周辺住民の方々にご協力を頂きました。ここで厚くお礼申し上げます。

参考文献

- NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会 (RAC)
(2004)『NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会 (RAC) 指導者HANDBOOK』河川環境管理財団.
- 沖田ちづる (2005) パートナーシップを活かした川づくり—福井県・日野川流域交流会を通して—, 多自然研究,118,pp3-11.
- 沖田ちづる (2006)『河川流域の利用と管理における住民関与の研究—2つの事例を通して—』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 (現人間文化創成科学研究科) 博士論文.
- 国土交通省河川局河川環境課 (2007) 河川景観ガイドライン「河川景観の形成と保全の考え方」について, 沿岸域学会誌,19 (4), pp6-10.
- 田中保士 (2006)『「サクラマスの駅伝」プロジェクト日野川の横断施設 (撮影日2006年8月 19～23日)』日野川流域交流会.
- 日野川流域交流会 (2006～2007)『日野川流域交流会活動概要資料』日野川流域交流会事務局・武生商工会議所.
- 「水辺に遊び学ぶ活動」推進事業実行委員会 (2003)『水辺で遊ぼう学ぼう! 川の自然体験副読本—家の近くに観察ポイントがいっぱい』福井県土木部河川課.

多自然研究はこんな情報誌です

◎読者の方々からの投稿により紙面を構成します。

『多自然研究』は『多自然研究ネット』に登録していただいた方々の情報交換・交流・発表のための雑誌です。掲載する情報は読者の方々からの投稿を中心に構成します。情報を全国に伝えたい人に、集めたい人に、知りたい人にフルに活用していただきたい『多自然研究』です。

◎多自然研究は幅広いネットワークの情報誌

『多自然研究』は『多自然研究ネット』に住所、氏名等を登録していただければどなたにもお届けします。全国の研究者、研究機関、活動グループ、コンサルタント、行政部局、企業、川づくりに関心を有する方々などを幅広くネットワークします。

◎毎月1回お届けします

『多自然研究』は毎月1回、年12回発行します。ですから、新しい情報が全国に素早く伝わります。『多自然研究』はリバーフロント整備センターから皆様へ、毎月直接郵送によりお届けします。

登録の方法

◎登録は簡単

『多自然研究ネット』への登録は簡単です。葉書に住所、氏名、連絡先、自己PR、会員の種別（法人・個人）をご記入の上、リバーフロント整備センターあて投函して下さい。当センターへ到着した翌月から多自然研究をお送りします。なお、毎月25日以降の到着分の葉書につきましては、事務手続きの都合のため、翌月扱いとさせていただきます。また、特にお申し出のない限り、登録は継続させていただきます。

◎会費

年会費（4月から翌3月まで）は、個人会費が3千円、法人会費が1万5千円です。グループの方は個人、法人のどちらでも登録できます。なお、年度途中の退会の場合、一旦納入された会費はお返ししません。

◎特典

「多自然研究」に掲載された原稿執筆者には、**図書カード¥3,000円を贈呈**します。

「多自然研究ネット」会員の皆様の投稿をお待ちしています。

◎会費の振込

年会費の振込は、毎年6～7月に郵便局の振込用紙をお送りします。事務処理上、特に支障がない方は、この振込用紙を使ってお振込みください。振込手数料はかかりません。なお、近くに郵便局がない方、事務処理上銀行でないと困る方は、下記の口座にお振込下さい。

みずほ銀行新橋支店	普通預金	1724589	財団法人リバーフロント整備センター
三菱東京UFJ銀行本店	普通預金	7659022	財団法人リバーフロント整備センター
郵便振替貯金	00180-3-405375		財団法人リバーフロント整備センター書籍口

なお、新規に登録いただいた方には、当センターより請求書、振込用紙をお送りいたします。

【お問い合わせ】

財団法人 リバーフロント整備センター 多自然研究編集部 丹内、伊藤（将）
tannai-m@rfc.or.jp

多自然研究 第152号

平成20年5月1日発行

編集 財団法人 リバーフロント整備センター 多自然研究編集部

発行人 竹村 公太郎

発行所 財団法人 リバーフロント整備センター

〒102-0082 東京都千代田区一番町8 一番町FSビル3階

TEL 03-3265-7121 FAX 03-3265-7456

ホームページアドレス <http://www.rfc.or.jp/>

印刷 西印刷株式会社
